

かきもりしょう
第35回柿衛賞は

わたなべ いつき
渡邊 樹さんに決定！

<内容>

令和8(2026)年3月26日(木)に開催した選考委員会において第35回柿衛賞(かきもりしょう)の受賞者が 渡邊 樹 氏に決定しました。

また、柿衛文庫の創設者岡田柿衛翁を偲んで開催する「柿衛忌」で、表彰式、記念講演などを6月7日(日)に別紙「第35回柿衛賞の受賞者決定」のとおり開催します。

※「柿衛賞」とは

俳文学研究のさらなる発展を希求し、柿衛文庫(かきもりぶんこ)の創設者である故・岡田利兵衛(柿衛翁)の事蹟を永く顕彰するため、平成3年度より設けられた新進俳文学研究者(当該年次の6月5日において満45歳未満の方)への奨励賞。柿衛翁の忌日6月5日にちなみ、毎年6月の第1日曜日に「柿衛忌」を開催しています。

<問い合わせ先>

市立伊丹ミュージアム 加藤

代表：tel.072-772-5959／fax.072-772-5558

直通：tel.072-772-7447／fax.072-781-9090

第 35 回柿衛賞の受賞者決定

- * 受賞者 渡邊 樹 (わたなべ いつき) 東京都在住
- * 受賞者履歴 1995 年 9 月 9 日生まれ 30 歳
京都大学大学院文学研究科文献文化学専攻
国語学国文学専修修士課程修了
同 博士後期課程指導認定
京都大学大学院文学研究科非常勤講師
武蔵野大学非常勤講師 現在に至る



- * 受賞対象研究
「七夕の朝顔 一室町詩歌における和漢の混淆」
〔たなばたのあさがほ 一むろまちしいかにおけるわかんのこんこう〕
〔「國語國文」94 卷 3 号(通号 1087)、2025 年 3 月刊行〕

* 受賞理由

第 35 回柿衛賞選考会は、2026 年 3 月 26 日(木)に、選考委員全員出席の上で、渡邊樹氏の論文に授与することに満場一致で決定した。

歌語「あさがほ」が昼にはしぼんでしまうという属性と、「七夕」における牽牛と織女との 1 年に 1 度の一晩限りの逢瀬というニュアンスとを「はかなさ」「無常感」という発想で繋ぐ詩語「牽牛花」の淵源を 14 から 15 世紀の、万里集九等の五山の詩作品に求め、和漢聯句を媒介として、「七夕のあさがほ」という趣向が和歌・連歌にまで普及した可能性について論じるものである。歌語「七夕のあさがほ」に着目することで、「室町詩歌における和漢の混淆」の実態を解き明かすことに繋がった論文で、研究の方法・目的ともにきわめて明確である。

詩文集や記録にまで「牽牛花」の例を求めて宋詩との影響関係を指摘した第 4 章では、詩語「槿」「牽牛花」と歌語「あさがほ」(「むくげ」)の混淆をすでに和漢聯句の作者たちが容認した上で超然とした境地に遊んでいたことを指摘している点が秀逸である。本論のすべてが徹底した用例調査と確かな解釈に支えられている。

五山文学にしる、和漢聯句にしる、日本古典文学史上最高の境地に達したものでありながら、中世文学を専攻する者にあっても、年齢の多寡を問わず、これほどの精密度で、膨大な用語や用例の検索調査読み込みをなした上で、行論をなしうる研究者は絶無僅少であろう。論者は^{よわいしりつ}齡而立に達せぬにも係わらず、それをいともたやすげに、かつ楽しんでなしえているごとくである。願わくは、この楽しみを万人に共有せしめることを目指して、今後とも、いっそう楽しみながら、精度を高めつつ、研鑽を積んで欲しいものである。

本論文は、前年度の論稿「和漢聯句における漢詩文受容―「月桂」の句から―」と同じような問題意識に基づきつつ、論文の構成力・訴求力も明らかな向上を示した。第 35 回柿衛賞受賞にふさわしい業績として高く評価したい。(選考委員代表 池澤一郎氏)

- * 選考対象論文 11 名 15 点
- * 柿衛賞実施要項・受賞者一覧(別添資料参照)

* 受賞者発表・表彰・記念講演等

柿衛文庫の創設者である岡田柿衛翁を偲んで開催する「柿衛忌」において、柿衛賞受賞者の発表ならびに表彰、代表選考委員による講演ならびに受賞者による記念講演を開催する。

「柿衛忌」

日 時：2026年6月7日（日）開場 13:00 / 開演 13:30 / 終演予定 15:00

場 所：市立伊丹ミュージアム 1階 講座室

聴 講 料：一般 1,000 円、柿衛文庫友の会会員 500 円、大学生以下 無料

定 員：40 名（要申込、先着順）

主な内容：・第 35 回柿衛賞の発表ならびに表彰

・代表選考委員による記念講演 早稲田大学教授 池澤一郎氏

・受賞者による記念講演 京都大学非常勤講師 渡邊 樹氏

お申込み・お問合せ先：市立伊丹ミュージアム TEL.072-772-5959

柿衛賞実施要項

〈総則〉

第1条 俳文学研究のさらなる発展を希求し、柿衛文庫創始者の故柿衛翁岡田利兵衛氏の事蹟を永く顕彰するため、柿衛賞を制定する。またこれにより、柿衛文庫コレクションのさらなる活用と我が国文化および市民の教養の向上を図る。

〈主催者〉

第2条 本事業の主催者は、市立伊丹ミュージアム（伊丹ミュージアム運営共同事業体・伊丹市）及び公益財団法人柿衛文庫とする。

〈表彰〉

第3条 表彰の対象は、新進の俳文学研究者で、かつその研究内容に将来性のみられるものとする。

- 2 表彰は、年に一人とする。ただし、その年に該当する者がいない場合は、表彰を行わない。
- 3 受賞者には、賞状及び副賞（30万円）を贈る。
- 4 表彰は、柿衛忌（6月5日）の前後に適当な日時を定め、行なう。
- 5 受賞者は、表彰ののち、記念講演会を行う。

〈選考〉

第4条 受賞者の選考は、選考委員会が行う。

- 2 選考委員会の委員は、6名以内とする。
- 3 選考の方法は、選考委員の推薦を受けた候補者の中から委員会が受賞者を決定するものとする。
- 4 選考委員の任期は、2年とする。ただし再任を妨げない。

選考委員会内の了承事項

- 1 受賞の対象となる研究内容は、連歌・俳諧・近代俳句・川柳・雑俳などの「俳文学」全般とする。
- 2 受賞の対象の「新進の俳文学研究者」とは、当該年次の6月5日において満45歳未満の者をいう。
- 3 受賞者の選考は、当該年次の前年の1月から12月までに発表された論文または著書（発表月日はすべてその奥付に従う）に、それまでの研究業績ならびに、その研究の将来性を勘案して行う。
- 4 受賞者の発表は、伊丹市広報・各日刊紙・柿衛文庫友の会ニュース等で行う。

備考 選考委員会内の了承事項2 受賞の対象の「新進の俳文学研究者」の年齢については、平成30年3月29日実施の第27回柿衛賞選考会における審議に基づき、従来の満40歳未満から、満45歳未満に改定する。

柿衛賞受賞者一覧

回／年	対象論文	受賞者	受賞年齢等	現在
第1回 H3	和漢聯句の俳諧的側面 —『百物語』所引句をめぐって	深沢眞二	30 (国文学研究資料館助手)	東洋文庫専任 研究員
第2回 H4	月尋堂とその周辺 —その知られざる活動の一面	藤原英城	30 (京都大学大学院 博士課程)	京都府立大学 教授
第3回 H5	常盤潭北論序説 —俳人の庶民教化	飯倉洋一	37 (山口大学教養部 助教授)	大阪大学名誉 教授
第4回 H6	<候>字の俳諧史	母利司朗	37 (岐阜大学助教授)	京都府立大学 名誉教授・客員 教授
H7	震災のため中止			
第5回 H8	昌琢における発句の方法	宮脇真彦	38 (東横学園女子短 期大学専任講師)	
第6回 H9	連歌と和歌注釈書	鈴木 元	34 (中京大学,武庫川 女子短大非常勤講師)	熊本県立大学 副学長・教授
第7回 H10	兼好伝と芭蕉	川平敏文	28 (九州大学大学院 博士課程)	九州大学教授
第8回 H11	『奥の細道』の展開 —曾良本墨訂前後—	小林 孔	35 (大阪城南女子短 期大学専任講師)	大阪城南女子 短期大学教授
第9回 H12	宗因顕彰とその時代 西山宗因年譜稿	尾崎千佳	28 (大阪大学大学院 博士課程)	山口大学教授
第10回 H13	村上霽月の転和吟について 「文人」俳句最後の光芒	池澤一郎	37 (明治大学法学部 助教授)	早稲田大学教 授
第11回 H14	『近世中期の上方俳壇』	深沢了子	36 (鶴見大学文学部 日本文学科専任講師)	聖心女子大学 教授
第12回 H15	『連歌提要』に見る里村家の連歌学 『梵灯庵袖下集』の成立	長谷川 千尋	29 (京都大学非常勤 講師,)	京都大学教授
第13回 H16	『俳諧のころころ 支考「虚実」論を読 む』	岩倉 さやか	26 (九州大学大学院 博士課程)	静岡県立大学 教授
第14回 H17	江戸座の解体 —天明から寛政期の江戸座管見 他	井田太郎	31 (国文学研究資料 館助手)	近畿大学教授
第15回 H18	該当者なし			
第16回 H19	其角『新山家』の方法 其角と荷兮 其角『雑談集』と尚白	辻村尚子	29 (大阪大学大学院 博士後期課程)	大手前大学准 教授
第17回 H20	「天然ノ秩序」の「連想」 —正岡子規と心理学—	青木亮人	34 (同志社大学大学 院博士後期課程)	愛媛大学教授
第18回 H21	該当者なし			
第19回 H22	芭蕉連句の季語と季感試論	野村亞住	26 (早稲田大学大学 院博士後期課程)	玉川大学講師
第20回 H23	宗牧と宗長	竹島一希	32 (立命館大学非常 勤講師)	京都府立大学 教授

柿衛賞受賞者一覧

第 21 回 H24	元禄俳諧における付合の性格 —当流俳諧師松春を例として	牧藍子	30 (鶴見大学文学部 専任講師)	成蹊大学准教授
第 22 回 H25	岡西惟中と林家の学問 芭蕉における『本朝一人一首』の受容	陳 可冉	32 (四川外国語大学 准教授)	四川外国語大学教授
第 23 回 H26	湖十系点印付嘱の諸問題 —〈其角正統〉という演出	稲葉有祐	36 (立教大学ほか非 常勤講師)	和光大学教授
第 24 回 H27	古俳諧の異国観—南蛮・黒船・いざり す・おらんだ考	河村瑛子	29 (名古屋大学大学 院博士後期課程)	京都大学准教授
第 25 回 H28	子規の短歌革新、その変転—鉄幹子規 不可並称説を視座として	田部知季	26 (早稲田大学大学 院博士後期課程)	富山大学准教授
第 26 回 H29	該当者なし			
第 27 回 H30	該当者なし			
第 28 回 R1	和漢聯句における述懐の題材と連想	楊 昆鵬	43 (武蔵野大学准教授)	武蔵野大学教授
第 29 回 R2	嵐雪発句「名月を家隆にゆるす臙かな」 考	服部温子	38 (奈良女子大学非 常勤講師)	伊賀市芭蕉翁 記念館学芸員
第 30 回 R3	新興都市江戸の事物起源辞典—菊岡沾 涼『本朝世事談綺』考、『事蹟合考』と 江戸の地誌—斎藤幸孝手沢本を中心に — など一連の沾涼研究	真島 望	41 (成城大学非常勤 講師ほか)	熊本県立大学 准教授
第 31 回 R4	惟然・支考の「軽み」—芭蕉俳諧の受 容と展開—	金子はな	36 (豊橋技術科学大 学総合教育院助教)	左に同じ
第 32 回 R5	俳文と物尽くし—元禄三年九月一三日 付加生(凡兆)宛芭蕉書簡の再検討	砂田 歩	31 (上智大学大学院 文学研究科国文学 専攻博士後期課程)	左に同じ
第 33 回 R6	該当者なし			
第 34 回 R7	・近世中期における江戸歌舞伎と俳諧 の交流—『古今役者四季発句合』をめぐって— ・歌舞伎と絵入り俳書—『役者手鑑』 『役者発句占』をめぐって— ・太申の出資活動とその意義	古川諒太	28 (東京大学大学院 人文社会系研究科 日本文化研究専攻 日本語日本文学講 座 助教)	左に同じ
第 35 回 R8	七夕の朝顔 —室町詩歌における和漢 の混淆—	渡邊 樹	30 (京都大学非常勤 講師)	左に同じ